【第２分科会「地域」発表資料】

「防災体験プログラムでつくる地域とのつながり」

〈キーワード〉・防災・関係機関や団体との連携・つながり

学校名：兵庫県立和田山特別支援学校
発表者：ＰＴＡ前会長　藤田智広

1　学校の概要

本校は、兵庫県の北部、朝来市に所在する「天空の城」との呼び名で一躍有名となった「竹田城跡」を望む、風情ある城下町の外れに位置しています。昭和 54 年４月に、肢体不自由のある子どもたちのための養護学校として、兵庫県立出石養護学校和田山分校として誕生し、その後、平成４年４月に兵庫県立和田山養護学校として独立開校となりました。平成９年には、高等部と寄宿舎を設置し、小中高と継続して系統立てた教育と併せて、文字通り生活のすべてが自立への学びにつながる環境が整うこととなりました。その後の法改正による「特別支援教育」の開始に伴い、平成 19 年には「兵庫県立和田山特別支援学校」に校名を変更し、平成 22 年には知的障害者部門を併置し、現在に至っています。

今年度は、小学部 14 名、中学部 13 名、高等部 24 名の計 51 名が在籍しており、うち８名が親元を離れて寄宿舎で生活しています。

和田山特別支援学校から竹田城跡を望む

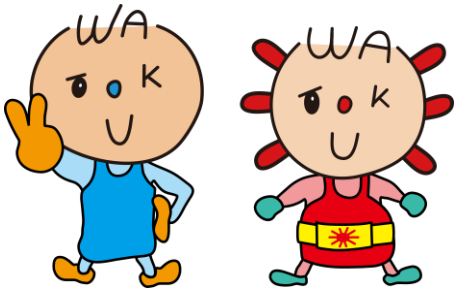
2　本校の特色

(1)　本校の西側には、兵庫県北部と南部を結ぶ国道 312 号線と日本海へと続く円山川を挟んで竹田地区の城下町が広がり、東側には竹田城跡を望む北近畿一の桜の名所「立雲峡」があるなど、環境には恵まれた場所に位置しています。

(2)　本校は、肢体不自由及び知的障害の児童生徒に対して、小学校・中学校・高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を習得させることを目的としています。

(3)　児童生徒の多くは、朝来市内及び養父市内在住のため、スクールバスで通学しています。自宅が兵庫県南部にある等のため通学が困難な生徒は、親元を離れて寄宿舎生活を送っています。

(4)　他校との交流も盛んで、竹田地区内に位置する朝来市立竹田小学校をはじめとし、朝来市立和田山中学校、兵庫県立八鹿高等学校などとも、交流を行っています。



マスコットキャラクター

わとクン　　わとくサン

3　ＰＴＡ活動の概要

(1)　ＰＴＡ組織

本校のＰＴＡは、小学部、中学部、高等部からそれぞれ役員数名ずつを選出しており、その役員による役員会により行事を立案、検討し、保護者に活動への協力を依頼しています。

(2)　ＰＴＡ活動の経緯

かつては、ＰＴＡの活動は前年踏襲の活動に終始し、役員会でさえ僅か数人しか集まらない、この先の活動がどうなってしまうのかと危惧される状況に陥った時期がありました。しかし、この数年の役員の努力と、保護者相互の連携を主眼に置いた活動を加えてからは、保護者の積極的な参加が行われるようになり、活動が目に見えて活性化してきています。

本校における保護者の連携は、子どもたちが卒業した後のネットワーク作りにも役立っています。

PTA陶芸教室

カフェわとく

4　取組みの内容～防災体験プログラムについて

(1)　防災体験プログラムの概要

兵庫県は、平成７年１月 17 日に、阪神淡路大震災という大きな災害を経験しています。非常に大きな被害を出したこの災害以降にも、大雨等による自然災害が毎年のように発生し、その都度、被害が発生しています。自然災害は必ず発生することはわかっていますが、いつ、どのような形で発生するかはわかりません。

常日頃から災害に対して備えておく必要があり、万が一の災害発生時に大切な命を守るため、防災教育は避けて通ることはできないものとなっています。

防災体験プログラムとは、重度の障害のある子どもたちから大人までが、防災について楽しみながら体験することを通じて、それぞれの障害や発達や年齢に応じて学ぶことができるプログラムです。

(2)　目的

防災体験プログラムを通じて、学校、児童生徒、保護者による防災教育にとどまることなく、地域の人々にも参加していただくことで、社会教育の一環として地域全体の防災意識の高揚に努め、万が一の時の災害に備えることを目的としています。

また、学校としては社会教育を通じて地域への社会貢献を行うことができますし、同時に、地域の人々と、学校、ＰＴＡ、そして児童生徒たちとの接触の機会を通じて、学校と障害者への理解を深めていただけるきっかけになればと考えています。

現時点においては、学校や児童生徒が地域の一員として、地域に貢献できることを、地域の人々に理解していただくことを当面の目標としています。

(3)　経緯

当初は、阪神淡路大震災が発生した１月に合わせて、学校行事において通常の災害避難訓練等が行われていました。それは次第に、防災に関して熱意を持って指導を行う先生方の努力も重なり、ＰＴＡが参加する防災訓練や福祉避難所開設訓練へと発展することとなりました。そして、回を重ねる毎に行政、ＮＰＯ、企業、自衛隊等を巻き込みつつ、現在では地域の方々にも参加していただく大きな行事に発展しています。

(4)　近年の実施状況

ア　2018 年１月

○　防災クッキング

防災士による研修と保護者参加による災害時のクッキング教室を行いました。耐火性のナイロン袋で食材を混ぜてお湯の中で加熱する調理方法を紹介してもらうなど、たくさんのレシピを教えていただき、作ることができました。

防災クッキングの様子

○　防災体験プログラム

本校の児童生徒と朝来市立竹田小学校の児童、保護者や地域の方々が、見て、聞いて、食べて、を体験しながら、災害時の行動や防災に関する学習をしました。煙体験や非常食の試食、水消火器体験等、10 箇所の体験ブースを設け、普段なかなか体験できない活動に興味津々な様子でした。自衛隊の方には災害救助キットの活用方法を、消防本部の方には煙の中での避難の仕方や水消火器による消火器の使い方を、また「あさご防災の会」の方には、ツナ缶のロウソクや物干し竿と毛布が担架として活用できることなどをそれぞれ教えていただきました。

水消火器体験の様子

○　ワークショップ

「和田山特別支援学校が避難所になった場合に必要なこと・もの」についてグループに分かれて話し合い、対話による研修を行いました。

イ　2019 年 1 月

○　午前　「防災体験プログラム」

ＰＴＡによる災害時クッキング教室が昨年以上の規模で行われ、多くのメニューが完成しました。体育館では、様々な活動を通じて、災害時の被害や生活について学びました。昨年以上に、ＡＥＤ体験や、災害時の食器作り、消火訓練など、児童生徒が直に体験できるブースも増え、参加された地域の方々との交流が活発に行われる結果となりました。

特に、ＰＴＡによる災害時クッキング教室で出来上がった非常食を、児童生徒が自ら作った食器を使って食べる体験は、格別なものとなったようです。

○　午後　「福祉避難所開設シミュレーションゲーム」

午前中の防災体験プログラムに参加した経験を基にして、災害発生時に和田山特別支援学校が避難所になった場合を想定して、グループに分かれて図上シミュレーション訓練を行いました。行政、職員や地域の方々と一緒に、災害時要援護者の防災について考えました。参加者の多くが実際に阪神淡路大震災を経験した世代による検討となり、現実味を持った訓練になりました。

ウ　2020 年 1 月 17 日

阪神淡路大震災からちょうど 25 年。

児童生徒、保護者、地域の方々、教員が一緒になって様々なことを体験し、学び、考えるよい機会となりました。

○　午前　「防災体験プログラム」と「福祉避難所開設訓練」

体育館で、様々な活動を通して災害時の被害や生活について学びました。今年は、去年に引き続きのドローンや非常食の試食、水消火器を使う体験に加えて、津波や洪水の高さの展示、パワードスーツや避難所の体験、県立和田山高等学校消防団の取り組み披露など新たな活動プログラムを含む 16 箇所の体験ブースを用意しており、そこでは、児童生徒と地域の方々との体験を通じての交流が、例年になく活発に行われました。

福祉避難所開設訓練では、実際に避難所開設をしました。初めての体験ですが、段ボールベットを組み立てるなど、避難所開設に必要な事を実際に行い、参加していただいた方の協力を得て実際の避難所で起こった様々な困難な課題にも対応しました。

○　午後　研修会

福祉防災コミュニティー協会から講師の湯井恵美子氏を迎え、保護者、行政、地域の方、教員の参加により、午前中の福祉避難所開設訓練の振り返りや避難所の課題、地域の課題、特別支援学校の防災などについて研修を行いました。

(5)　現状

防災体験プログラムは、回を重ねる毎に、参加団体、参加者を増やしています。

回を重ねる毎に、参加者には、より実践的でありながら、防災に関して必要な知識をできるだけ易しく身につけることに配意しつつ、同時に、本校の児童生徒と参加者の積極的な交流を促すことにも配慮しています。

その目的は、支援学校には全く縁がなかった方々にも、本校と、児童生徒に触れ合うことによって、学校と子どもたちのことを少しでも理解してもらいたいという願いがあるからです。

そして、成功裡に終了した 2020 年 1 月の防災体験プログラム以降、参加された地域の方々による独自の防災研修会が実施されたり、校外学習時には児童生徒に声をかけていただく機会も増えるなど、確実にこのプログラムが地域に根を張っていく様子を、私たちは肌で感じ始めていました。

しかし、2020 年 3 月の新型コロナウィルスによる緊急事態宣言以降、そういった行事の全てが中止を余儀なくされてしまったのです。

地域の方々をはじめ、防災体験プログラムの実施に当たり、協力を求める関係者の方々と子どもたちとの貴重な交流の機会は失われ、私たちの抱いていた希望が、暗礁に乗り上げようとしていました。

そんなある日のことです。地域の方々から、本校にビデオレターが届けられたのは。

防災体験プログラムがきっかけとなって、学校と子どもたちに関係していただいた方々からの、子どもたちへの応援メッセージでした。

それは、私たちにとって、未来への希望の芽が出た瞬間でした。

5　成果と課題

毎年、この「防災体験プログラム」が少しずつでも拡大を続け、各方面の力を借りて、より多くの人に、この学校と子どもたちに直接触れ合い、少しでも理解してもらえる機会を作り、同時に、地域に対する社会貢献を行う機会が続けば、将来的には、いつかきっと、卒業後の子どもたちを含め、障害者に対して理解を示してくれた地域の人々が、彼らを地域の一員として認め、見守り、あるいは直接間接問わず何らかの支援の手を差し延べてくれる機会が出てくるようになるのではないか。

そうすれば、子どもたちは地域の一員として地域に溶け込み、地域に貢献できる機会も得られる。この防災体験プログラムの推進によって、いつか、地域全体に優しい循環が生まれてほしい、障害者にとって、今より少しでも優しく寛容な社会になってほしい、という願いを込めて。

今は、防災体験プログラムの再起動に向け準備中です。

6　おわりに

ＰＴＡ活動が「どうあるべき」か、私たちにはわかりません。そして、「こうあるべき」だと上から目線で決めつけるつもりもありません。むしろ、「こうあるべき」と決めてかかること自体、視野を自ら狭くして活動の幅を狭め、ＰＴＡ活動や子どもたちのことを理解したつもりになっているだけで、実は理解できていないのではないか。単なる自己満足に終わるのではないか、とさえ思えます。

もちろん、今私たちが行っていることが、ＰＴＡのあり方として正しいと言うつもりもありません。

保護者として、また大人として、願いが無限にあるように、方法もまた無限にあるはずです。

いつかきっと、子どもたちが社会の一員として認められ、地域社会に貢献でき、地域の人々から見守られつつ幸せに生活できることを祈って、今は少しずつでも、できることをやっていきたいと考えています。

子どもたちと学校と地域の人々の笑顔のために。